

動物に教え、学ぶ。

～動物トレーニングの現場から～

大森山動物園がテーマに掲げている「動物と語らう森」の主役である動物について、動物行動学的な側面から取り組んでいるトレーニングを取り上げ、「なぜ、どのように行うのか。どんな効果をもたらすのか。」を概説し、動物トレーニングの実際をいくつか紹介します。

動物トレーニングについて

飼育展示担当 副参事 佐藤 佐十志

人に身近なペット動物では、「犬やねこのしつけ」のように、人と共生し、楽しく暮らしていくためにトレーニングが行われています。動物園動物の場合はどうでしょう。多くは野生動物であり、人と直接触れる機会は少ないのですが、病気の予防・早期発見・治療のためには動物に触れることが不可欠です。このため、人が触れても平気でいられる馴致トレーニング(ハズバンダリートレーニング:採血、体重測定、投薬などの健康管理を安全に行うためのトレーニング)が必要になります。

トレーニングは、動物の自発的な行動を促す「オペラント条件付け」を基本としています。これは、「動物の行動は、それを行った後で得られる結果によって決定される(道具的条件付けで学習する)」

ことを利用したもので、動物にある目的の行動をとらせた都度、褒美(エサ)を与えれば、号令に従う条件反射が強化されることを意味します。簡単に言うと、オペラント条件付けトレーニングは動物を「ほめてしつける」ということになりませんが、トレーニングを進める上で大切なのは、動物は人とは違った習性・行動・社会構造を持ち、常に人を注視していることを理解しながら、しぐさ(ボディランゲージ)や表情から動物の気持ちを読み取ることです。

適切なトレーニングは、人と動物の信頼関係を構築し、ペインコントロールなどの動物福祉にもつながります。動物園では、ハズバンダリートレーニングが中心となりますが、トレーニングの行き届いた動物は見る人に安心感を与え、周囲から温かく受け入れられます。動物の能力・魅力を最大限に引き出すツールとしてもトレーニングはますます重要になり、動物の視点に立った展示と生態保全が求められている中で、動物園動物にもトレーニングを施すのが当たり前になっていくでしょう。

動物病院から

健康管理のためのトレーニング

獣医師 柴田 千秋

大森山動物園では様々な動物のハズバンダリートレーニングに取り組んでいますが、その中で私たち獣医師が主に関わって行っているのが動物の採血トレーニングです。採血により血液検査が行えると、動物の健康状態を知ることができますし、動物の体調が悪くなった時にその原因を探る手がかりにもなります。そのため、定期的に採血ができるようトレーニングを日頃から行うことはとても重要なことなのです。

私が初めて取り組んだのはカリフォルニアアシカでした。一部の水族館などで行っていますが、当園では初めてのことで、私自身も全く知識や経験がなかったので、採血をする場所や使用する針の太さなど基本的な情報を調べることから始まりました。それから実際にアシカの近くに立つこと、次はしゃがむこと、その次は採血部位の脚脛を触ることなど動作を一つずつ慣らしていきました。そして、最後には針の代わりに先の尖ったもので刺激して慣れさせ、



ついに採血に成功することができました。

現在では他に、アミメキリンやアフリカゾウの採血トレーニングにも取り組んでいます。どちらも昨年末に採血ができるようになりました。キリンでは、このようなトレーニングはこれまでほとんど行われていなかったのも、とても画期的なことです。ゾウは、他の動物園で行われていますが、当園では幼い頃に嫌がって以来約12年間でできなくなっていましたので、大きな進歩でした。

これからも新たな健康管理のためのトレーニングや、さらには治療を想定したトレーニングなど、担当者として協力して取り組んでいきたいと思っています。

飼育レポート

1 元気で長生きしてもらうために

飼育展示担当 山上 昇

さて問題です?ゾウさんの寿命はどれくらいでしょうか。ゾウはとても長生きで65年ほど生きると言われています。大森山動物園の「だいすけ」と「花子」は、秋田に来て21年が経過し、現在22歳(推定)。まだまだこれからのゾウさんです。だからこそ大切なトレーニングがあります。

当園では、健康管理とゾウと担当者の信頼関係を築く目的で当初からトレーニングを行っています。特に、2年前からは「足の手入れ」と「採血」のトレーニングに力を入れて行っています。その結果、巨漢を支える2頭の足の手入れと花子の採血(血液を調べることで健康状態がわかります)が、可能になりました。足の手入れは、ゾウが小さい頃からトレーニングを行っており、まねごとのようなことはできていましたが、実際に削蹄や治療をする際、安定して行うことができませんでした。また、採血に至っては、♀が10歳頃に成功したことは

ありましたが、それ以降は、注射針の痛みが脳裏に焼き付いたのか?採血を試みても拒否され続けていました。しかし、トレーニングの積み重ねの結果、12年ぶりに耳からの採血に成功しました。この瞬間、花子のトラウマも解消されたような気がしました。この感覚を忘れさせないために、計4回の採血を試みていずれも成功することができました。

この成果を大切に、今後もトレーニングに磨きをかけ、お互いの信頼関係をもっともっと深め、2頭が元気で長生きし、その中で2世誕生もできれば、担当冥利に尽きると思っています。



飼育レポート

2 大きなアシカと一緒に

飼育展示担当 千葉 可奈子

大森山動物園では、2008年からアシカのマヤ(13歳)のトレーニングに取り組んでいます。私が初めてマヤと会った時の印象は「でっかいアシカだな～」でした。そのうち「この大きな動物に、もし、何かあったらどう対処できるのだろう。」と考えるようになりました。エサの時間以外は人に対し過度な警戒心を持ち、エサの時間であってもどこにも触ることができず、目で得られる情報は微々たるものでした。「ケガをしても麻酔をかけなければ何も出来ない。でも麻酔をかけることはリスクを伴う。もし麻酔をかけずに早期治療できたら大事に至る危険性もかなり軽減する。それならば頭の良い動物だしトレーニングは可能だ。ついでに人にも慣れてくれたら人にとっても安全だ!」ということでトレーニング開始となりました。

はじめは簡単な吻タッチや握手などから練習し、トレーニングを

通じて信頼関係を築いていきました。その甲斐もあり、以前は新しく見るものすべてを怖がっていましたが、今では新しく見るものに興味を持てるまでになりました。現在は、毎日体に触れ、口の中もチェックしています。過去に2回、採血による健康チェックも行いました。また、ある程度人の指示に従って動けるようになったため、お客さまに簡単なサインを出してもらってのエサやり体験や展示場の近くまで呼んで一緒に記念撮影などの、お客さまサービスをこなすことができるようになりました。今後もまだまだ発展していく予定ですので、マヤの成長を見守っていただきたいと思っています。



飼育レポート

3 ミニブタ散歩の裏側

飼育展示担当 志田 昌信

大森山動物園に来たことのある方なら見たことがあるかもしれませんが、当園には芸達者なミニブタが2頭います。グッチンゲンという品種の雄のミニブタで、名前をトン吉とトン平といいます。寒さに弱く、冬はほとんど外に出ることはありませんが、暖かい時期には外で散歩をし、「お座り」や「お手」などを披露して来園者に楽しんでいただいています。しかし、こういったトレーニングは人に見せるためだけに行っているわけではありません。実は飼育管理をする上でとても役に立っているのです。

例えばミニブタの体重を量るにはどうしたらいいでしょうか。体重計に乗ってくれ、と言っても乗ってくれませんし、無理矢理持ち上げて乗せようとしても逃げてしまうでしょう。ミニブタには立派な牙があり、怒らせれば人を傷つける可能性もあります。しかし、人につい

て歩くことと、「お座り」ができれば体重計まで誘導して乗せることができます。トレーニングでは、目的とする動作ができたときには必ず褒めた後、褒美としてニンジンとサツマイモをあげています。

今は車などで移動することを考えて、大型のケージに入るようにトレーニングしています。多くの動物は狭い場所に閉じこめられるのを嫌います。それを怖がらなくなるように時間をかけて慣らしていきます。他にもまだまだ覚えてもらいたいことがたくさんあり、トン吉とトン平には頑張ってもらいたいと思いますので、見かけたときには応援してあげてください。



トン平

トン吉